

飯島夢心著  
日本絵類考

一

10
75
11





日本繪類考

凡例

- 一 此の書ハ我國上古々々迄世々々々迄の種類と蒐集—漢學國語と顧るに—して研考証と加へたるものなり 題して日本絵類考とす
- 一 絵類考ハ年代と進み順序と定の例載さんと—が種類煩雜や—て年代未詳のもの取らざりて先づ蒐集もの所を載とおき年代順序ハ他日更ふ改めて定む—
- 一 引用の書於て—今—と其の書目と指く

予の暇有りて中小引書なきものありて是未  
く書し筆とさる所のとけなれは因返と願  
てして此載をさるる

一 佐類考ハ一々佐重と筆けて示さんとせし  
余ハ因る重道と拙くして重くこと終る  
重工と備りて重くせんよハ事甚煩い  
て板折のよけハ其の現物とあけて示し  
杜なるとも余り重く得んよハ其の  
事と載をたぐの

一 卷末小重官佐重等と筆くこと等ハ佐類ハあ

らさしとも佐重小同係と一要件なれハ指  
載なきを因者ハの書ハ海録と又倣一覽  
ありんこハ故希よの

明治三十三年十二月

著者 飯島虚心述

日本佐類考卷一

目錄

佐重起源

上古佐

鞠佐

委陀佐

盤佐

泥塗佐

玉佐

紙佐

墨ノ佐

つノ佐

歌佐

葦子佐

綠起佐

物語佐

方ノ佐

絹佐

倭合  
女倭

倭具  
似倭

日本倭類考卷一

倭画起源

文晁画法云倭画の温筋と号す昔軒輅氏  
の代温洛中小史皇倉頡のひひひひの古の聖人の  
倉頡造書史皇製画とあり如とも書ハ画と造  
と号小史ハ小史と其の初ハ一致也といふ  
顔光祿云々圖載の意三あり圖程ハ卦象之也  
なり圖識ハ字學之也なり圖形ハ倭画之也  
形又周官圃子教以六書其三曰象形又有虞十

飯島虛心著

二章ハ彩位の権輿也周子也孔子明堂小  
きて堯舜の容樂付の象と云々各善惡の怖也  
と周云相成王抱之負斧扆南面以朝諸侯之圖又  
後素の語也又因之ハ彩色此の時盛なり  
秦漢ハ即殿閣切臣の像と画之法其形貌著其官  
爵姓名ト何モ晋ハ即戴安道獨好画范宣以為無  
用不直勞心於此戴乃画南都賦圖范看畢咨嗟甚  
以為有益重画其の後顧愷之出つた乃ハ画の  
次中と云々論して云々凡画人物最難山水次  
狗馬臺榭一定器耳難成而易と云々六朝南齊謝

赫古画品録云氣韻生動骨法用筆應物寫取隨類  
傳彩徑管位置傳筆枝画骨法之下五端可學而成  
氣韻必在生知と云々論訂して云々後之盛人  
以降画の墨跡と云々云々云々云々云々云々云々  
創物能者述焉非人而成也君子之於學百工之於  
技自三代歷漢至唐而備矣故詩至杜子美文至韓  
退之書至於顏魯公画至於吳道子而古今之畫天  
下之能事畢矣と云々云々云々云々云々云々云々  
華實備ハ云々又書ハ晋小盛小画ハ唐小盛也  
云々云々云々後宋ハ唐小次云々云々云々云々



忘寸者出自魏文帝之後安貴公也  
率四象瑞化男祀一作名善信上小泊瀬雅鷦鷯天皇  
其其能賜姓首五世孫勒大壹惠尊亦上儀天智天  
皇御宇賜姓倭臣師高野天皇神護景雲三年依在  
地改賜大岡忘寸姓也

信皇沼華考馬川其新著小雄畧天皇の七年百濟  
國より同斯羅我より一臣師と貢一雄畧紀小又  
由一曰天皇の御宇魏文帝の後より一安貴公と  
りしとの瑞化と一其安貴公の子辰貴と一  
との信と善と一姓或孫より一雄畧天皇の御宇

百濟支那の臣工本邦小来りて其の巧藝と旌一  
あれハ信皇の道弘まりて本邦の人もこと小智  
ふとの多うけし而してこと等の臣工を臣部  
又臣師といふを以て本邦の人のこと小智ひ  
又とありし一一臣師ハ臣大く信事小長とる者  
と稱さるるを書小長とる者と手師といふも亦  
曰一しておんと雄畧天皇より以前の臣ハま  
後也小所習持振りて之を旌して以て其の物と  
裝飾さるる雄畧天皇より以後の臣ハ物象と  
撰字さるるを以て用ひしこと小智ひて持振るハ



自別如？之也本邦重凡の意？了才了了  
荆川稗編、重原、宋史、皇典、蒼頡、皆古聖人也、蒼頡  
造書、史皇製畫、書與畫、非吳道也、其初一致也、天地  
初開、万物化生、自色自形、結々林々、莫得而名也、惟  
天地亦不知其所以名也、有聖人者出、正名萬物、高  
者謂何卑者謂何、動者謂何植者謂何、然後可得而  
知之也、於是上而日月風霆雨露霜雪之形、下而河  
海山嶽草木鳥獸之著、中而人事雜合物理盈虛之  
分、神而畫之、化而宜之、固已達於民用、而盡物情、然而  
理書無化裁、非畫則無彩施、斯二者其亦殊途而同

歸乎吾故曰書與畫、非異道也、其初一致也、且書以  
代結繩、功倍偉矣、至於辨章服之有制、畫衣冠以示  
警飭、車輅之等威、表旂旅之優先、所以飾倫、其法具  
匡贊其政、原者又烏可以廢之哉、畫後之事、於冬官  
而春官外史專掌書、令其意可見矣、況六書首之以  
象形、象形乃後事之權輿、形不能足、象而後諧之、以  
声声不能足、諧而後會之、以意意不能足、會而後  
指之以事、之不能足、以形指而後轉注、假借之法、興焉  
書者所以濟畫之不足者也、使畫可盡則畫事、年書  
矣、吾故曰書與畫、非吳道也、其初一致也、古之善、佐

者或畫詩或圖壽徑或頌兩雅或像論德暨春秋或  
著易象皆附徑而行猶未失其初也下逮漢魏晉梁  
之間講學之有圖回祀之有圖烈女仁智之有圖致  
使國史並傳助名教而翼群倫亦有可觀者焉世道  
日降人心寢不古若性之歸志於車馬士女之華怡  
神於花鳥虫魚之靡靡情於山林水石之幽而古之  
意益衰矣是故顧陸以來是一衰也嗣吳之後又一  
衰也至於國李范三家者出又一衰也譬之學書者  
古稱篆隸之茫昧而唯俗書之姿媚者是耽是玩豈  
其初意之使然哉至如非有卓然拔俗之姿亦未易

言此也而徐之君景暘工書史旁通後事有士韻而  
無俗姿予甚愛之於其別故作原魚以贈焉嗚呼易  
有之聖人有以見天下之顯而操諸形容象其物直  
是故謂之象然象之事又有包乎陰陽之妙理者彼  
可謂至重矣景暘其亦知所重乎哉

上古伝

我國上古は伝は如何なるものなり。詳ならず  
きととも蓋し諸物象と金石本竹陶器なり。彫  
りつけたるもの其の殆ど一王川氏書法を以  
て考と著す。柏木氏所著の古陶器の画は、川  
辺氏模写の古墳内の遺物と考へて、是即上  
古の伝なり。一理あり。似るも其の遺物の  
こと

柏木氏所著古陶器出所詳ならず。其の陶器は  
損して何の器たりと知らず。是れも王川氏の

寺よの奇鬼の墓なる一と云ふ

男

黒川中田く右の腹小横のいしるの刀を  
一両足の同小更けの陸奥と陸奥を  
取の二点の耳なる一鼻と耳との間の二点  
の鼻孔なる一但取部の男女とも凸出せ  
る

女

女葬中して陸門の薄き竹篋のこゝに  
て深さ七分許さし入るる  
籠後岡上妻郡山内村大伴波加磨の墓の内  
面川辺女撰字と一所在の如し

鞠繪

鞠徒ハ鞠ノ切リナリ徒ノ也ハ字ト  
うクト工ト也鞠ハ其ノ器ナリ鞠徒ノ事ハ古  
来諸説紛々ナリ新井白石ハ鞠記ニ曰鞠者古射  
著臂以避強之器也源順以謂鞠徒字當作鞞鞞初  
得伊州神庫所藏及藤光長所画射礼等圖略見其  
形製唐宣之冬奉使于洛之日得天府工人所造者  
又見垂相藤定基之物皆製以素絹竊疑此物可用  
熊鹿等皮為之事見延長式既而湯明大相國公賜  
以其家藏古却秘刑所圖其圖与伊州神庫所藏无

長所重者大同小異而造之之法不詳春歲之春泉  
州人仇安殷之書得見并著干楨之佳古社者其形  
如甄而短小健良為之塗以烏漆臣以胡粉其所  
即世之所謂鞠脩也其倪頗与武舍嗣後安殷西歸  
而請主庫者模社中之物以贈云今世其工亡矣莫  
知所以造之法者故刻木模形其似大漆画一如之  
嗟其器猶存而其工既亡不可得其制也况於器工  
俱亡乎孔子曰觚不觚觚哉觚哉蓋如此之謂歟維  
茲蔡邕有言曰尚有典刑吾於此物亦云干時丁酉  
春三月廿九日白石吳書于涇川橋居竊疑之式

史載應神帝臂上肉起如鞠古歌亦有鞠音之語蓋  
其形制如毬而有柄觸弦則鳴者也世既失其制而  
陽明文相國故云亦謂之滑干鞠化後君美我俗  
亦稱鞠後世傳以為水滸之象亦因借用巴字非也  
虞書漢大之火周礼画火以圖又宣和博古圖并圖  
古器飾以圖紋者皆是我所謂鞠脩也鞠者古射着  
臂以避弦之器源順以謂鞠脩字當作救余檢諸書  
並無鞠字蓋我俗所製从革从丙丙字俗讀為火之  
兄語与火之佳同其器用革為之以火佳之義取干  
此火亦轉言鞠脩者其所画之象如鞠也出雲州所

隸臣墨郡古称鞠位上古神人相其地勢似重鞠之  
象故名云古重飾用大者最多栲梁舟車於今所存亦皆重之  
者惟有樂鼓舞臺及屋瓦之飾而已後人諱災故称  
之鞠位亦附以冰燭之象而其義亡矣丁酉二月書  
久志本夏曰鞠名義字義共小未詳今按  
止毛之言止年字法受此の義字鞠  
ハ本朝の制ハ文字ハハハ字ハ鞠  
鞠未詳呂氏春秋ハハハ止毛ハハ  
借ハハハ其制ハ神代ハハ  
其名ハ加良と称ハ名義未詳今按ハ其音ハ

名ハハハ万葉集ハ丈夫之鞠乃音ハ奈利ハ  
伊勢神宮の書ハ鞠音不聞之因ハハハ是ハ  
又底神能ハ上古時ハ号鞠謂保武多ハハハ又  
古人名義と称ハ今按ハ保武ハ古武の轉音ハ  
ハハ古武良ハ起ハハハ古事記  
雄畧天皇の傳ハ服ハ多古年良ハハハ其の多  
ハ良ハ上下と異ハハハ保ハ音の通ハハハ  
保武多ハハハハハハハハハ  
笠原家法由以通云能家の射ハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハ

と顯昭云真善弓と用ふの鞆と取らざりし和名  
以云唐國簿令云仰射弓和名方々江次舟小真  
奉弓矢しし由今按小上さしし弓くしと  
すししし、和名高と毎しし中鞆の真庫或曰然  
鞆鞆料長九寸廣五寸半鞆半料長五寸廣二寸  
生絲縫鞆料鞆倍更長二尺五寸送官皆云仰鞆  
口長四寸五寸九徑四寸厚二寸塗黑漆画半文附  
村儀組有金銅金物石の或ふししと鞆の半と  
て送ししと工人といふ徳化小鞆法と  
しとされしと神代化の臂著積成之高鞆と方と


古事記の竹鞆の他、今古事記のさしし  
の上古の竹と偏ししし、送しし高竹口削  
た、和名高神代化の擬借して用しし比しし  
又神代化と正ししとハ鞆の形の臂小高と記し  
た、和名高鞆しししし、上古の製他今  
記ししし、和名高云蔭勢切韻云鞆和名  
止之揚氏漢倭抄日本紀等存臂避弦具也毛詩注  
用鞆字倭亦用之本文末評  
云袷襪也礼弓矢同云襪臂鞆以朱韋為之ハ鞆  
字と止毛と刑とさしし、字書ハ鞆射鞆以皮鞆  
臂とあり和名也云説文云鞆和名方々射臂皆





てこととくとい 鞆たもとの腕の上肘の下臂の内端に  
 包て注と鳴との具なりこゝ明白なり比知に肘  
 と制と和石杵云廣雅云臂謂之肱四声字苑云肘  
 或胆和臂節也とあり是なり  
 石比知  
 尾川氏曰 佐佐治佐の神代より所を其のありと  
 して傲の出雲風土記上卷惠曇卿の条小惠曇の  
 郡家東北九里三十歩須佐能乎命伊弉册日  
 子命國巡行坐時至坐此処而詔此處者國雅美好  
 有圓形如重鞆哉吾之宮者是處造事者詔故云惠  
 伴(神皇正統記)年改正惠曇とくへたよて 御

野佐鞆と云ふことい 佐と重と云ふ 鞆と云ふ 故  
 小佐鞆の石あり因て重と鞆の革とて造るなり  
 そのなまとい物の象形と彫つゝそのなまとい  
 て重と云ふことい 鞆と佐と作ること  
 佐と重と云ふ事なり 巧の出来て 佐と佐  
 云ふことい 其の事の進んで 丹青白粉ありと云  
 りてそのと重と云ふことい 佐と佐と云ふ  
 こと云く  
 摺邊くワク子ル氏 鞆佐の注と佐と云く古重  
 く易家と佐と 三と湯と 三と湯と 其の注湯

循環して窮るる象と示すありし  の図と  
以て蓋し世小句玉と稱して極妻と云ふもの  
其の一片即此の形なり又此形は万物生成の  
模象なりて動物の胎生卵生小混りて植物  
物の種のごときも月如く成胎して皆此形あり  
故に古人は之を以て之を地と名し之を性女の  
に最天地を尊敬と云ふものなり 此即其の句  
玉と或は禱小御なりて今世の守護者の如く  
小舟と稱するも一重と考ふるも此國社の  
ごとき諸神社の如く 己の紋と稱するも

こは或は又一片を加へて天地の小象たるもの  
の如く 一説は 大なる理ありし似  
たり

臺院魚

臺院魚ハ臺院僧とてうきたる魚なりハ以テ  
此の魚傳へて喜古一川の者なり大和玉法隆  
寺金堂をく所の玉貴の厨子の真小推古天皇の  
時の製して其の須江坐の四面ハ臺院魚なり  
正面ハ須江山の園右ハ金光明王經の推古名飢  
花小肉身と歌ひしる意在ハ涅槃經の四句偈  
八字の文と譯し祈の意と申きてあり工藝志料  
ハ臺院魚ハ其の娘ハ輝なり天平勝室八歳春  
謙天皇奈良の東大寺ハ寄附とてくら流の花盤

穀口あり其の製たぐり本質ふ襖とてふ布とて  
てしきうて塗ふ漆とてしきう表面の漆の上  
ふ白色の漆泡僧とてしきう更ふ黄色の漆泡僧と用  
りて人物あしひり鳥獸花蝶草木の図とて色を  
面ハ漆の上赤色の漆泡僧と用ひて赤口図  
とてしきうて其の図表面とてしきう箱罌など  
けりて今尚其の宝庫中ふあり是より由てことと  
親しむけの漆泡僧の盛ふ行りしことと知  
きしきう又桓武天皇延暦十三年都を山城の平安  
城ふ築む爾來風俗一変一器物ハ存佐和子地也

ふの埋細とて集装とてしきうの歳月ふ行りし漆  
泡僧とてしきうのハ人街うらとて用ひしきうふあり

盤法

盤法一、小重、龍文、波文、梅菊、鳥羽、竹、内、重、き  
た、と、以、小、旗、遊、装、寛、小、丸、つ、の、重、重、い、も、と  
装束の紋、と、洞、房、も、竹、と、禁、秘、抄、清、法、殿、の  
篇、小、南、重、重、古、厨、子、二、脚、玄、笠、も、朝、餉、の、條、小、凡  
師、洞、度、等、近、代、舟、重、法、白、又、以、白、薄、押、重、法、竹、と、何  
下、重、井、氏、の、法、小、重、高、作、盤、丸、き、紋、よ、う、て、其、紋、不  
定、と、し、も、け、説、經、と、て、梅、小、重、法、と、も、常、出、装、束  
の、紋、を、重、圓、と、も、唐、へ、女、樂、と、賣、と、も、賣、ま、り、れ  
ハ、夫、と、う、く、し、も、傳、へ、て、し、て、く、巾、と、も、其、服、の、後

なりし虫佐とりし其紋田より盤佐の祀部  
し虫國の模振なりしは漢よりありなり  
ても明なり是れ虫佐の古きものなり

五古保 或者 久ふしは上古の模振なり長きも

のし田ありて洞底の并佐なりしと虫画と

としはる唐柳のうつくしき形或は龍の田より

とと虫画とありしと文獻通考云虫佐曲也四

角なりしものと管形なりしと物曲也云く中右記

在物盤也西立記云丸紋の四角なりしと管形云

丸きと虫とりし也云く是れ虫佐なりしとあり

と刑なりしは竹のしりしと虫佐とりしは今

装束に随月の福島の佐に虫佐とありしと又樂

人の下裳の袴に虫佐なりしと下裳なりしと虫佐

とありしは下裳にありしと伶人の虫画と

侍にありし

任虫畫法は田より形の中より草花木葉なりし鳥獸虫

鳥なりしものと虫と樂音のきよの或は諸の

たなりしは角なりしと古く虫画と稱ししと松平

翁侯の記よりしは虫佐に虫國の佐とりしは

あつり 塗すの儀にて用ぬる所なりと 盤信と  
書たり 盤といはるるものとむねはは名ありふ  
る

按之 諸儀録に 何れは是なりと 新しきれと 松  
平氏 森多村氏の二流の川根 確実なりと 新し  
くも 何れも 壺井 秋名 二氏の流の流く 諸書と 探  
るて 何れも 是と 云ふと 是と 云ふと 是と 云ふと

### 泥塗信

泥塗信は 泥として 赤白の二色と 又ハ 衣飾の具と  
搦るといふ 工 藝 志 料 泥として 器物と 塗る 是  
ハ 古 古 小 丹 として 器と 塗る 是ハ 雨 奴 利  
也 といふ 泥 小 赤 色 あり 青 色 あり 黄 色 あり 白 色 あり  
と して 器物と 裝飾を 崇神 天皇の 九年 天皇 神の  
御 小 鏡 八 枚 玉 指 八 枚 赤 指 八 枚 赤 指 八 枚  
と 塗る 以て 神 幣 となり 黒 赤 と 稱し 者ハ 丹 臺  
と して 塗る 是ハ 本 邦 小 鏡 八 枚 赤 指 八 枚  
小 丹 臺 と 用ぬる 是ハ け 小 鏡 八 枚 赤 指 八 枚 赤 指 八 枚



天皇詔して轎車は丹青とて仕飾る。其の  
得たり。むこし。先き丹青とて轎車及び  
棺と彩る。こゝろ。こゝろ。此の製あり。重  
武天皇の所。宇世の深待寺。於て用ひ。祈の因  
膳子麻子机等。多々。泥と能く。於物と務と。の  
一。あ。又器物及樂器。金銀泥とて。重く者  
あり。彩泥とて。重く者あり。後花園天皇の所。宇  
世の深待寺の。人。善。葛藤。右。日。時。子。根。と。意。板。と  
工。人。と。て。之。を。造。り。彩。泥。と。て。こ。ろ。と。重。く。寛  
永年間。本師の人。所。言。親重。と。い。ふ。者。あり。と。い。ふ。

彩泥とは。器物。小。重。く。頗。風。致。あり。親重。ハ。人。形  
と。造。り。と。て。書。き。な。り。一。名。と。主。團。と。い。ふ。好。し  
時。人。親重。の。造。り。所。の。泥。重。の。器。と。稱。して。雜。名。細  
工。と。い。ふ。

黒弦

黒弦ハ黒くして黒く連きたるものナレハリト天  
平の黒弦と稱し天平年同行り且たそのりて  
奈良正倉院の古物の中彈弓の膝小百餘の人物  
ト黒弦とて切りて何れも高野の凡俗及び伎楽の  
さゆと寂ひるふまふとのけの圖は寫しと  
帝國博物館より

紙巻

源氏伝命よけの世にたかくたさし  
紙巻とてけりしことと天下のなごり又  
わと伝ハのまりあそび山吹の由たうなるむと  
つとえとせつらきぬ物なれいたる華のさきそ  
人のぬよつらそとてらとて今のさきそなる  
もむらゝの跡よそぢなごりさきりさきりあかた  
そらとえとそらとそらとあそりてあわりのあか  
きひともきりさきりさきりあそりさきりあかた  
わうそ 花鳥鑑巻よ昔に綴ふあきたる今

世より紙ふわく紙紙佳と云ふ事 玉の小櫛  
小紙佳陸子屏風かしの佳小對してた書きたる  
と紙あゝハツツと云ふ花鳥の紙いゝと云  
任卿集小花山流うせ佳了紙佳小紙つけて  
佳と云ふ事云ふくまへき新ハつけと云  
なすつけと云ふ人の持御ひて文ひろきてわさる  
有 持たぬ友ハつけと云ふ文これ昔の人小  
あゝくゝと云ふ 長秋集小花山流は手つと  
かゝ佳のせしひて人小秋つけと云ふ佳ひ  
小秋の常裁ささるれと云ふ紅葉面白く云ふ

さね紙の玉おちふと云ふ 錦おとる本の紙  
くゝの白紙 柱造和歌集小素義云の紙佳小書  
馬の紙ふわくの事云ふ馬の紙新紙師云  
よハ紙の紙の事云ふ紙の紙ハ一つの紙か  
いの紙の紙の事云ふ紙  
紙造紙造ニ花鳥紙佳小昔の紙ふわきたるを今  
紙也よハ紙ふわくと紙重と云ふなりと云ふ紙  
紙と云ふ紙と云ふ紙佳と云ふ紙と云ふ紙  
と云ふ紙と云ふ紙と云ふ紙又ハ折本小押  
たると云ふ紙と云ふ紙と云ふ紙と云ふ紙

て留はたけ長くあまの飯をつまみたてんよいら  
ちーかろー

臺如き法

臺如き法は臺より東に彩をせしむるとりし法也  
畧して其如きより玉の小柄に其ま如きハ彩  
をせしむること小對してたゞ法とわくこと欲い  
しる名目なり古ハ法とわきて彩色といふちふ  
他人のせきせしむるありて極小ニツナリけて  
さう如きつくまゝといふこと法中相法等本小  
徑所小上まゝといふこと如きふえふことしてつ  
まゝいふこと小柄に其ま如きことけりぬ極小に  
さくまゝといふこと人のえおまゝぬわら

いの山あゝ梅のつゝはらゝいとよの姿わが國のそ  
けしき萩のうらち目ふえしる鬼のうかたしの  
おしらゝゝゝゝつくもたゝ物いむよまゝうきて  
いとまゝ人の目と驚うしておちよゝいぬきかえ  
とまてあゝぬらゝよのつねの山のたゝそまゝい  
水のならは目よちゝまゝ人の家居あゝさゝめさゝ  
とゝてたつゝゝゝゝやゝゝゝいゝたゝめゝゝゝとゝ  
つらよ書ませしてまゝよかたゝぬ山の氣色あゝ  
うゝせそ好とてたゝゝゝゝけぢうまゝはうまゝの  
中とゝゝそのむゝゝゝいとまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
わうたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ふまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
まのよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
國へ修ひてまゝ

つらま法

つらま法は墨書きしつらま法と彩書しつらま法とをいふ  
新撰記は作法湖月抄につらま法といふ墨書きの  
うへに彩書しつらま法とありて法名物語須磨よこの  
頭の上より上はつらま法とありてつらま法といふつ  
らま法といふつらま法といふつらま法といふつらま法といふ  
つらま法といふつらま法といふつらま法といふつらま法といふ

歌徒

棠花物語うや夏臺 弘高うう〜徒如き〜  
ふさう〜小行成り君〜書きたりあとい〜  
うおう〜ほらんせら〜 後撰和歌集 雜別  
とちのくま〜まう〜き〜くお麻〜〜て教  
重小如〜せ時〜き〜 ほとけ 又〜れゆ〜乃の雲  
井上なりゆけい〜と〜き〜こう徒も ちのふ〜く〜と  
と 指迷集 雜賀 大其國章むま〜の 五十四  
りりこ〜〜〜〜を徒〜〜せき〜 え補 松  
のこけち〜せと〜うけてたひ〜けと〜つ〜れ〜い



このまゝもいゝ—— 倭詞花 大其四章の子  
うまきで情をなす。いりの日よりこの歌後よか  
きこゝ。 倭系え補さるゝの江ふ流のまゝこのふ  
けぬきていそねとちんわとこをうし  
長田才文の後ふ指違ふいゝ。こゝと曰く時  
のゝちん。 越ふ指違ふまゝとひ  
倭詞花ふいふうまきといゝ。いつとらた、  
——かゝん梅ふ倭詞花のうゝとく——  
倭千載集 歌更し海士の松やくとら流ふとま  
つこち。 木のこゝと書てくのそとつとこ

まゝ。 其本形四方の海ふあわらむ海士のこゝ後  
かゝるゝいゝかゝるゝなげはとやつと

筆手法

源氏物語 極うえ あーての草紙とてそあ  
話〜よそうな〜わ〜き筆相中好のハ水仕  
のきわいあ〜いよかきな〜そ〜けたるあーの  
あひさあな〜福徳の〜あかゆひてこあ〜か  
た〜あま〜そ〜い〜さ〜た〜と〜らあま  
ま〜い〜は〜あ〜い〜ひ〜き〜て〜文〜あ〜石〜ふ  
〜の〜た〜あ〜い〜この〜あ〜信〜る〜あ〜あ  
〜目〜あ〜あ〜い〜い〜い〜あ〜い〜あ〜あ〜あ  
うあ〜あ〜あ〜あ〜信〜あ花物語 根合 池

けうしそ大おまぢきふ白き鳥ともの思ふよ  
たけしそも華ものうらうら〜てわう〜 任者お佐

南ハ一山ハの里ハのうらふらえてて昔屋とともふ

まのわしけ〜きうと曇よりける草もよ似〜そ

玉葉集 夕暮ふぢふいあ〜そをきて又とふ

た〜うと曇のあ〜てわりりて 日 千載集奏

賢の好いとしてけう〜も若ふあ〜てふ荷〜そ

ふ歌 皇太后 宣 赤歌の〜ふ千〜のねもと〜ま

つとて 百代も〜も君〜らん〜め 十七代集

津の國ハ侍り〜 以来ふあひあ〜〜人のもと

ふ孝と文のう〜ふうま〜侍り〜 津國 つの〜ふ

けぢふそよそと〜し〜そ〜と何〜〜と又〜も

ま〜と〜と〜ん 世聞 あ〜と歌ハ佐の中と文

まふつ〜とた〜まのな〜武彦ふ〜〜て〜ハ草

な〜と下佐より〜文あ〜と〜き〜〜た〜な〜歌

佐〜ハヤ〜ソ〜ハ夫と〜き〜ハ〜ソ〜ハ橋とか

き〜と〜ソ〜ハ并と佐〜わ〜ち〜 花鳥陰情

あ〜〜の色葉ハ草の葉ハ中〜文あ〜と〜わ〜ち〜

水石鳥ち〜のわ〜〜もわ〜ち〜とあ〜中峰和尚

此世の葉はまじりて文字の癖は藤の葉は何れも  
 うららかに 建礼門院古集古文集 あーての  
 ちりまーしーたんーふたーうーくまのぬのう  
 ちやうまーて云と 松の落葉 あーてい草はか  
 まーしー水とまーしてわーんふ歌の文まをうそ  
 墨ーてわそーつーけて草の生うーやうふのま  
 ちちう歌ーしーひきまーわー物語よふ草  
 も歌位もいーしーまー昔もそまーりうま  
 と下のこーあてまあそらーわく文字と草のか  
 たちよめまあーてあーてとつひつー歌そーめ

まて後うい水のかうまーいそわのたうまま  
 いあぬのさゆとも歌の文まーてあまなまーこ  
 といなりまーあそそまーまーまーそのしひ  
 ちらーのまーあーてまーいしうまを あまら  
 水とまーまーてしーしーしーいむうーてあーて  
 のやうめまーいさやーままーいあまーこれい水と  
 ちうーまーてまのまーい草もまあひまとあ  
 っー 和削梨 天徳歌合の本ふまうれのまゆ  
 ひぬくとおわひいふちのまそまあーてとぬ  
 じよのふまーて歌合よ「書うれの跡邊のあーて

の墨うきとつらとてむる春のふく菜五月雨  
け紀の香包いりたるはけりてつきよきつと  
又つと又香あふもよきてと名を香包とい  
ふ和泉式部筆とちひわりて物の切つと  
こしやあふもあつてすふと「六帖よあつて  
てと程よきさうふとあつて川とこのさつづのり  
そつととと」 貞丈雜記 硯茶香匣と茶そ  
并伝ふあつて書つりつとあつて筆よ書と切つ  
なり香包の伝つとあつて書とさつなり筆  
よ書と切つなり香包の伝つとあつて書と

きつとあつて書つり古教つとと切つと文字  
と伝つと交つて切つとつとへい「あつて山のさ  
つとつとあつて切つとつとたつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと

又い侍つとと書つとつと  
あつと切つとつとつとつと  
つとつと文あつと伝つと交  
つとつとつとつと書つとつと  
つとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと



ふと何となくおぼろげにさういふおぼろげにさういふ  
六法の規をたゞ書くこともあつたといふ  
其何れかの云違ふもの非君なりとの書  
手習筆とてさういふかたを筆とてさういふ  
とむの文章のよきよきを福徳清とつた  
きて重めつたといふその福徳の書物なる筆とて  
出づるものを何となくいふ塵法瑛雲抄小和泉  
式部筆とちいふつてさういふゆゑにハこと  
中やうそのあつたてなるといふ後世に傳ふ大信

正行度 畧天王寺へまゐりて 修むるに福徳とて  
きたまふとて「久しきふなまの」といふと又さう  
きいたく「墨のあつてなりき」といふ人聞  
「あつたところのゆゑへのまゐりて福徳のあ  
つてさういふ」きかへ聞へるさういふ。丁の  
墨をたゞ見のあつてふなりたまふと「さういふ  
らへ修むるに二集小法始あるといふけり又さ  
たをたゞ法のいろはのあつてなりき」修玉集小  
法まゝに福徳とてさういふと行つたやあつてのさ  
ふりける玉つたさういふとつたつこゝ筆の本

ひきし浦あしん為とてかかへる戸もとい冠彼  
ふのこよせたりとてまのち智ふむうへて画  
のち智ふとてまのち智ふとてむくつてのち  
そのち智ふとてあつての凡流なり其の何れと  
きて種々のまけり文様もまをまへり道達院  
宮内上の五月雨の比ふ香包の比ふ戸もあつて  
愚解任事ふあしりの山さくら戸とあけおきて  
我まつ人を誰とてむくつとつて歌とあつてふ  
かきたりとつて又中右比ふ比童は剣安  
志天并佐の細剣又飾抄小紙殿場筆手銀平緒二

筋やまあしハ筋の鞘の并佐より右比ふ入道は  
銀器平緒日筆手也併平緒厚司殿目身并佐云々  
又園右層小平緒の文章もまへり平緒の文  
なま衣服よりけりハ中務集小いひなの裏小あ  
してまてあしはかきひて結いたちぬり  
まのちあしとてまのちあしとあし其の  
外もこれいひまうへつてまのちあしとあし  
は即この糖麻のあしてまのちあしとあしこの  
筆子の裏の表に「あし梅の色も白ひとてひら  
小あしとていひまのちあしとあし」表に「あしの目と



る中をそなたてしうきやうさうけし小松うそ  
こたなひくしうし二首なりされいけの虫のこ  
しハ桐子元貞翁考へてわけそのちをそと  
文と省き展と括てうに注して好士の願と解  
くものちを 畧ともくあしうかか文とま  
しへてわく一種の信なりあうし源氏物語の  
梅枝の巻よあしうし信をねとひくしうけ  
この信ハいしあしうしとて筆もとくし信との  
けしめたわつうなうしよきしうしきか谷川士清  
の倭刺葉の信信のこしとあしてといはれ

異なりしうしとい富士石は枝の北辺信筆よハ  
筆の事を教信のこしきものふゆりしとをね  
まわゆるしうしとてたしうし志け小紙の存を  
そ筆を信してハ上件ふつしうし如く教信ハ一  
首は教の言と重しゆりしうしかくしを別の子細  
なりし後撰集小うちのくしうしをける人しゆし  
きてしうしとて信しきしゆしつけてきしけ  
るとしうし即こしをたしうし白山の雲霞雲煙  
の濃淡河水の細流大海の聲清その教言とそく  
しうしたるも重しうし無声の詩とつしゆし

らぬむらりしきそのなれは狂所の上もなれ  
の重きく人きくしりゆきし無くふ天志性  
来し假山水海様河様泉様造水様養井様細谷川  
様枯山水様山形形洲浜形筆形筆形はあは  
と歌佐様しきしを歌つるもあへけしと昔件  
ふしり如くむしり歌佐の歌よきとて山水よ  
と海よと河よと泉よと山よと形よと河よとか  
くもの故一種の名目ゆきしきとゆふゆふは  
ゆふゆふとあしきしゆふハ歌の心ともあしけ  
あしきともあしけとのゆふゆふとてふてふ

とあしきとゆふゆふの名目のこころゆふは  
先達こころゆふゆふつらさて一故にか正義と得  
さてしなすし  
古重備考に源氏物語えの巻小宰相中將式部白  
の字は兵衛智くちの太殿の源中將ゆふゆふ  
歌とゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
いとむつとあてとあてこのゆふ書とゆふゆふ  
ゆふゆふ書のことゆふゆふの本道の書ゆふゆふ  
ゆふゆふの温福ゆふゆふ又ゆふゆふゆふゆふ  
ゆふゆふの書とゆふゆふゆふゆふゆふゆふ



御とそよよい志りもよー何しての志りー書也  
りててうけよものなふハやとてそよよ四百  
年経ても古よとよ人の志りも博學宏才なる書良  
云志り信いさじんや又也呂新殿板印の注一  
らー信らんや又或る國比企新志克山一何一  
名経の標紙の表しけり教信も字の華意を用  
りて信りさきさきしりてなるとあも古のあ  
てりさきさきしりて福島信勝水石島せいの秋も  
書なれなりとあも考へたのさきしりて馬とと  
馬と教信なりといへりハ本道の書小基きて

華名の註しあはれずのち靡きたさきよち  
らー書とくちやうたよものなりといふ新説  
小むひりたよもやあじん以上漢國氏云くは  
一條ハ輪池翁考しりよそのと著し考証精  
くまよこれたよよハ何まさきしりて漢語を加へ  
たよやとこよハ其の要と括てあもさきさき  
よハ本書小物と云ふ也

保元佐

保元佐いさへて神仏の由来及び功德等と祀載し  
重國と加へたるその細い古の書面より奉物  
と一又の板刻して奉物としてその今稿各地  
の神社佛圖に一枚掲げたり丹ありと一保元あり  
て奉物の人々購ひ去る

好古小録に鎌倉荏栢天神保元三巻虫行長書行  
尹卿 石山寺保元五巻虫第一二と隆兼祠果寺  
僧正第四光信補祠亥隆公第五虫隆光祠為重卿  
東征傳佐保元五巻卷鷹目殿 志貴山昆決川

錄起三卷 重并洞僧覺融 誓願寺錄起二卷 重二  
姓石不傳 清水寺錄起二卷 重先信書 南村云卿  
集書 注不動錄起二卷 重先茂 因幡重書師仁  
錄起三卷 重先信書 尊應准后 清涼寺 融通念佛  
錄起二卷 重大夫法眼永春 備前寺 光國 粟田口 隆  
光前 兵部大輔入道 寂濟 赤野寺 先行 土佐寺 行廣  
春日 修理亮 行秀 洞上 卷後 小松 帝宸 筆及 云卿 集  
書 下卷 慈照院 養政 云佐 木赤 松等 鞍馬寺 錄  
起三卷 重狩野元信 洞尊 應准后 解脫 明惠 錄起一  
卷 重巨勢有家 洞為相卿 藤澤道場 遊行 錄起十

弄 重隆光 洞二也 遊行  
重國品類二卷 田天皇 錄起一名 三韓 征伐 東大  
寺 八幡宮 錄起三卷 重主行 洞一條 大國寺 勢云 順  
道成寺 錄起重土佐 廣周 兒親音 錄起一卷 重  
任古 豐後 法橋 洞為重卿 地祇 錄起一卷 大會  
佛寺 錄起三卷 多岐 峰新 錄起二卷 重住吉 如慶  
洞 穿合書 藥師寺 錄起四卷 重府 錄起十二幅  
北野 天滿宮 錄起四卷 重伊豫 寺 隆成 真如堂  
錄起三卷  
本朝 重國品目二卷 壬生寺 錄起一卷 重者不詳 洞 瑛

川新古湯門 醍浦乙室寺縁起一巻任所預加賀  
寺伊久 香州王子稻荷縁起任所預隆芳詞入道  
内藏権政季邦朝臣 伊豆権現縁起森川弥三郎  
重

按ふ古来神佛社寺の縁起任所多し固くは小録  
品類等載せし所止りしなり今唯其の大  
概を掲ぐるのみ

物語画

尾川氏曰く 任重信 延喜天曆の除物語より一書  
世小行りしなり 其書は必文素の同小任國と加へ  
たり其任國と加へたるより一証は任氏物語縁  
起巻小生つ物語のいつきを以て之の初やなり竹  
太の翁小空穂の伝説とありたり所りとも云と  
任は巨勢相見書に紀世之わけをけん云と(こと  
は竹太物語の画工と筆者やとつもの)任は常則  
書の道凡そ是れ今覚うしむたうしけふたうか  
らやくして又也(こと)は空穂物語の画工と筆者

とりしつゝ)又口書小法うまむりまきうせ給ひ  
て梅妻小師信とも奉りて給へる年のうち節  
全とこの行と一給く興あふと昔の上もこの  
くま〜ふわけふふ延森の行もつゝ事のを  
うせ給へる(梅小師等い古き年中行ま信細と  
もりふらき姑のもの)又秋の沖世のく〜と書  
と信へる奉ふかの高徒のく〜とひ〜日の大  
極殿の儀式はむふあ〜とわが〜をれいわ〜  
きや〜と〜と〜作と〜と〜云々つゝまつと  
るうい〜と〜と〜と奉りて〜と云くとあま

この物信い其のうい実ふありとも確延森天曆は  
高村小物信といふ書格とて世に出るて予物信  
ふい必信と加へて以て興と〜たる信と〜  
一(天曆と〜と法物信と他も出るま益多〜源氏  
物信使衣物信落産物信あも最初の洋書の村小  
信と加へたるもの〜信せ冊ふ〜と〜と信  
とわ〜と〜とものま)さて其物信いま〜本邦の  
幸小因て改作と具ハ信とま〜ハ高村の風俗  
と〜一録小云々常則々画〜所ハ全国行成相覽  
云々忠孝の四轍と踏ま〜と〜新規と給〜高村の



人情小遠いしりりそかの信合若小信ハ常則云  
くし何れと見て知るしし因小お信信ハ本邦高  
野の風俗と云しししものちれハ後世の人らと  
しりりし其高野の風俗と寂ひ知るしし世評之  
無きとも壽永の初あて後ハ朝廷益事ハ年中  
行更の如きハ或ハ有界小行ハ或ハ行りさし更  
あておふらとと因信とさし小田村の或ハ極也  
あて高野有界の或ハ極也あて一カハ以好  
て其由と又人者ハ以ハ注意を以ハ行るはさ  
そ又お信信ハ本邦高野の風俗と云したるもの

かきしし其男女の容貌ハ字云とて作  
るたとい頗美人の存ありしと顔ハ内ハ眼ハ細く  
しり線の如く鼻ハ直信しし高野村行りし  
の重風やして云常則ハハ創末なるしし梅小  
野くは貴重やして風流因雅なる意と示しその  
り後世の人中古の美男美女と稱するものハ必  
全解肥満やして顔肉く眼細く鼻修ししものと語  
むはさしし予ハ世の如くしし因極ハ枕双依ハ  
信よりきておししものちし條小物法ハさして  
たししつひたる男女ハさしと又ハたそ云と

あて信

大鏡よ 花山あては信あそびにたそしきよふけ  
くあそびさハ走る車の輪よハくそまぬせりい  
ておろきさのやうやふとまよしよりのまをわか  
そせ信へそしきふめくこを町へうそけしは  
よそふそしき車いいつうハくあそび信ちハ又  
へ信よ又たっんふの信と男のおしひこよふ  
まてめめかこししてちぶをたそせわわあそび  
てあそびしきおぢたさうそ又そしきそそあそ  
の家のうちつくり法ふそしきせ信へそしきい

しきと〜さきあきんとのあま〜  
そはひ〜と云々

絹画

著聞集小後鳥羽院内幸徳奉人〜も福ふえ〜ハ  
きりひてほあ〜よけ定ふ市幸所〜と  
信実朝臣小作〜と巻の絹画ふ〜吐  
らとけ〜 源氏物語須磨二つ鳥〜なる〜に  
色〜紙とつ〜は〜と〜信ふ〜つ  
〜さ〜た〜座の信〜さ〜信とも  
とめき〜信〜屏凡の〜と〜い  
〜と〜と〜

信合

信合ハ重類と設け画者左右より各二と  
重き評して優劣と争ふ一評は古語に信合  
重國品類ノ文永信合加藤奈草紙一巻為信卿  
稿意自傳卷一ノ稿信亮云文永加藤奈の信ハ信  
合のたそよせよとのたよハ古語に信合の信と  
たうひて又よよさりよ真なりしと信てよよ  
よのたそよと 宝田氏の信合考ハ信重書信  
信合と云ふこと信合考ハ信重書信出つ  
世武部ハ源氏物語に云ふ信合と云ふこと  
されと





しつてのやわらきふたつて茶湯の室なとつく  
てそつちふのさきもあつてこつちかつて  
て聖もあつてふつち佐いあつてあつてあつて  
佐合いかたきと横の巻よりふちをうてつては左  
うて右のつちをうてつてつてつてつてつて判者  
とあつてせつてつてつてつてつてつてつて

佐貝

茶窓閑情の佐貝一りつちのあつて長一寸幅一寸  
五分評ふつて歌のむね名可風流と佐つて別の  
つてつて歌と書て歌貝のやうなつてつてつて歌  
ふ合つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

按ふ佐貝の貝おひつと黒白つてつてつて貝おひ  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

牌小伝とめきたるやうに具わぬひに一書小伝  
お伝の巻くの姿と拾の中よありき具蓋銀の  
まといなりぬま本集西行の歌小伝とあり二見  
の浦のそまうてと具合とておひらひなり

女伝

紫日誌 心とつゝつゝいけさつゝたし  
らつゝとあつゝたつゝ女伝のたつゝさつゝい  
似て云々 源氏物語伝角 ねつゝけつゝたつゝ女伝  
つゝものこひつゝ。男のままひつゝつゝませ云々  
口うけろよ女伝たつゝ書たつゝあつゝけし  
いとつゝてねつゝらつゝあつゝつゝつゝつゝつゝ  
釣殿とたつゝき句欄とたつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
とまのつゝたつゝ女あつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
きてつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ







重くとして拾はるる書門の筆とさるる如し其の  
首祖懐月堂と始々善川師直其村政信島在清  
信の徒相傳きて皆の女信と出きたる西川祐  
信の徒本百人善女餘本春信の善女其人合衆多  
川秋磨の善女年中好まむ北尾政徳の善女新善人  
合自筆集三世中興の時也姿等ハ皆女信の著在  
たるものなり其の他女信を如きたるハ吉  
川長春秋田湖流高膳川春幸佃田常之の徒也

似信

似信ハ削りてニセ工即字生画なりて其物  
の字信の形と字とを以て文徳家録二百濟河成  
在言中令或人喚從者或人辨以未見容貌河成取  
一紙圖其形狀或人遂駭得吉槻北ニ乾元二年  
正月廿六日日吉社市幸下條任任法眼被召所前書  
半馬似信堪能事源氏物語末篇末髪末なりき  
女と似き信末似とつけし又信末云々こ  
まハ常陸服者の似信と似き信末なり文龍  
重信小東鑑卷十二仁治二年末十一月末南將軍

家法時關東尉似位可被國之由有其法今日以  
評定次先往其人教此陸陸奧掃部助若被前司秋  
田城介為意見者被用捨之有京都就被仰下為被  
進覽也前武州祿候人依為違者被召出之輩可被  
加否及再往汝法是前武州不可然之旨有御色代  
之故被致被家礼為本任家人也又勤工被之上為  
堪之旗何憚可被除哉之由遂信定横溝六郎山内  
左衛門次郎等心可為其人教云々又兼久三年己辛  
七月八日庚亥今日御落飾後白河法皇御戒師以室  
道助先之召信實朝臣被著日影又法燈上人行狀

後嗣後白河法皇信仰の何事ぞ右京權右史隆信  
朝臣小おわたり上人真彩と圖して蓮華王院の  
室在木さき先代も事の例もさきも  
そそ中おへる又法性寺宮何れ佛ハ上人  
と佛の如く小崇願申されハ右京權右史  
隆信の子左京權右史隆信實朝臣ハ上人の真彩  
おのり一期のあり本尊とありきやこれ  
き高村知恩法小安命何れ法像真彩即らと  
中殿内會法も有像なりハハの外其のたれ  
女々々々好古小録ハ上宮太子画像法隆寺所傳

也國朝古東の存るものこま過ぎたるハ有  
へり衣服の制も柳考ふり著聞集小後  
堀河院時村似佳と所好の好るる北南下落  
御隨身なるの影と五京権右左信実朝臣とる  
てのせり此のよ右左永親其の様とある  
てなへりなる白襦きて北面小候ひるる  
一出さるる時右口と考へてきてあるけり  
いゝいゝあんなへ侍る云々

